整形外科医による地域の骨転移診療の適正化にむけた取り組み

生田 国大 ●名古屋大学 医学部附属病院 整形外科 病院講師



当院の骨転移カンファレンスの風景

要旨

研究開始後の2023年7月から24年3月までの間に、東海3県に勤務する若手整形外科医20名が当院骨転移カンファレンスに参加した。参加後に実施したアンケートにより、自施設における骨転移診療の現状と骨転移カンファレンスの内容について情報を収集した。

また、23年9月にがん診療拠点病院に勤務する若手整形外科医に対して、骨転移診療の実際と手術治療の適応について大学病院施設内の会議室においてハイブリッド形式で講義を行った。

実臨床では手術支援として、骨転移カンファレンスに参加した医師の所属する施設に出向き大腿骨転移性骨腫瘍に対する腫瘍用人工骨頭置換術を指導した。骨転移診療を適時的に支援するための症例相談ツールの運用について検討し、Slackを利用した相談システム構築を目指している。

1. 背景と目的

整形外科医の骨転移治療に関する知識は十分に普及しておらず、実地臨床で適切とされる治療が提供されていないことが問題視されている。

本プロジェクトの目的は、骨転移診療の知識を有している骨軟部腫瘍専門医が中心となり、がん診療連携拠点病院に勤務する整形外科医に対して骨転移カンファレンス参加を通じた骨転移診療の教育、症例相談システムの構築により、地域の骨転移診療の適正化に貢献することである。

2. 現状の成果・考察

研究開始以降、当院の骨転移カンファレンスに整形外科医20名が参加した。自施設における骨転移診療の実態と骨転移カンファレンス参加の感想についてアンケートを実施した。

自施設で複数診療科ががん患者の診療や治療方針を協議するキャンサーボードに出席した経験がある整形外科医は2名（10%）のみであった（図1）。骨転移カンファレンス参加が自身にとって意義があったかどうかを尋ねた質問では、非常に意義があった（7名：35%）、ある程度意義があった（11名：55%）、全体として前向きな回答が得られた（図2）。本カンファレンスへの参加が今後のがん診療に影響があり実践に役立てたいと回答したのは11名（55%）であり、一方で8名（40%）が影響はあったが実践は難しいと回答していた（図3）。これまで自施設のキャンサーボードに出席したことがなかった整形外科医からも今後の参加に対して積極的な意見がみられた（図4）。

図1 自施設のキャンサーボードへの出席経験についてのアンケート回答

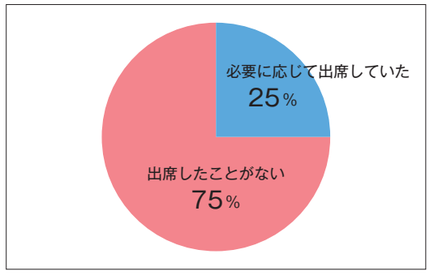


図2 当院の骨転移カンファレンス参加の意義についてのアンケート回答

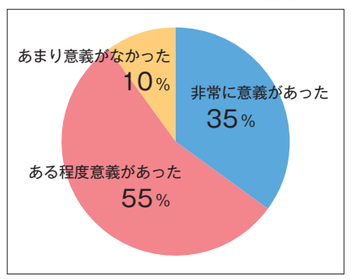


図3 当院の骨転移カンファレンス参加による影響についてのアンケート回答

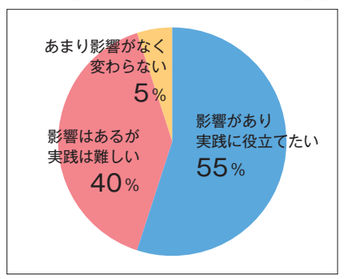
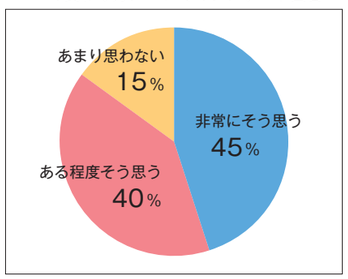


図4 自施設のキャンサーボードに対する今後の関わり方についてのアンケート回答

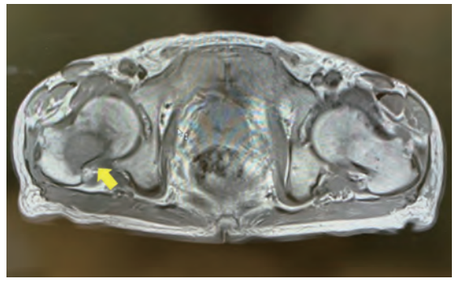


2023年9月にがん診療拠点病院に勤務する若手整形外科医に対して、当院施設内の会議室においてハイブリッド形式で骨転移診療の実際と手術治療の適応について講義を行った。また、骨転移カンファレンス参加者の施設で大腿骨転移性腫瘍に対する手術支援を2例に実施した。

骨転移症例の相談ツールの確立を目指し当院のITメディカルセンターと協議している。匿名化したファイルを電子メールでやり取りすることが最適であろうが、資料の作成が煩雑で時間もかかることが難点である。Slackはビジネス用チャットツールで、メールに比べてコミュニケーションが簡便であり、比較的大容量のファイルを管理でき秘匿性も保たれる。我々はSlackの採用を検討しているが、1ユーザー当たり1050円／月のコストがかかることが問題である。

3. 今後の展望

毎月開催している当院の骨転移カンファレンスには継続的に参加者が見込まれる。今後もアンケートの回答数を蓄積し、がん診療拠点病院における骨転移診療の実態を明らかにする。リッカート尺度を用いたアンケート結果から、骨転移カンファレンスの意義や参加者の意識変容について統計学的に解析し、学会発表を予定する。Slackを利用した骨転移相談ツールの構築を進め、資金を獲得して安定的な運用を目指す。本活動を継続することで、骨転移診療の重要性が広く認知され、地域の骨転移診療の向上に寄与することを期待したい。



肺がんによる右大腿骨近位部骨転移（矢印）を示すMRI axial像（T1強調像）



腫瘍用人工骨頭置換術後の単純X線正面像